

近代的価値と失われた認識

樺山紘一さん「歴史の歴史」

東大名誉教授で元国立西洋美術館長の樺山紘一さん(73)が、『歴史の歴史』(千倉書房)という風変わりなタイトルの本を刊行した。西洋史の泰斗が、宇宙意識、自然観、暦、奴隷、医術、グローバル化などを題材に、独自の歴史叙述を展開する。現代人が自明視しがちなものの見方に揺さぶりをかけ、捉え直しを促す一冊だ。

(文化部 植田滋)

『歴史の歴史』は、樺山さんが過去約30年間に発表してきた歴史を巡る思考をまとめたもの。タイトルは編集者の提案だったが、著者として「虚をつかれたが、妙味がある」と感じたという。歴史には、史料によって学術的に事実を提示する第一の歴史と、歴史家が苦闘し、思考しながら「読ませるもの」として自前の絵柄を描いていく第二の歴史があり、同書は前者をもとに後者を叙述したという意味で、まさに「歴史の歴史」だからだ。

「学術的な論述だけでは、歴史は無味乾燥になってしま

う。人に読んでもらえるものにするため、私自身が歴史総体の中に埋め込まれた存在であり、どのように歴史と向き合ってきたかをさらけ出しています」

とはいえ、同書は樺山さんの長年にわたる苦闘をつづった私的告白ではない。あくまで「第一の歴史」をもとにした西洋史の叙述であり、歴史書として十分楽しめる内容になっている。

主題は多岐にわたる。人類の宇宙認識や地理空間認識はどのように変化してきたのか。自然や身体についての思

考法が病の捉え方をどう変え、それによって医術はいかに展開したのか。古代ギリシアの奴隷と大航海時代の中南米の奴隷はどう違い、さらに近代に入って奴隷概念がどのような意味を持ったのか、な

宇宙、時間、人体…捉え方の変遷

など。これらの叙述から浮かび上がってくるのは、今では日常化している「近代的な価値」がどのような過程で形成されてきたかということと、逆に「近代化によって失われたり忘れられたりしたものや認識のあり方の中に、実は特別な価値があるかもしれない」という知見だ。

例えば、「時間」の観念。

樺山さんは、西洋の時間原理について、修道院の規律や教会の鐘の音によって規定される中世の「教会の時間」が、やがて経済性に基づく「市場(商人)の時間」に取って代わられ、それが時間管理を徹

底する高度産業社会を生み出し、人間を絶望的に縛る「時間」に感じる底抜けのペシミズム」がもたらされたことを記す。

だがそれだけではなく、「教会の時間」には教会堂の中庭や回廊を散策する相対的に自由な時間が付随していたように、「市場の時間」にも経済合理性だけでは語れない閑暇や祝祭といった時間が広がりを見せたことを指摘。そうした「空虚な時間」にこそ現代のペシミズムを和らげる希望があることを示唆する。「日本でも、お寺や神社に入ると通常と異なる時間が流れているでしょう。そこに歴史が深



樺山さんは現在、東京の印刷博物館の館長を務める。近く、17世紀オランダについての著書も刊行するという＝立石紀和撮影

く関わっている独特の価値があると感じる。そうした価値を救い出すのも歴史家の責務だと思う」

ほかにも、近代的な観念が直線的に拡大すると、必ずこれと異なる考え方が浮上してくる事例を多数紹介。人体を力学機械とみなす「人間機械論」が手術や投薬といった近代医学を拡大させたものの、身体は「痛み」や「老い」などが見直されると、人体を機械ではなく一つの有機体と見る古くからの考え方に光が当てられる、といったことだ。

「人間文化の中にはいろいろな価値が所蔵されていて、今は忘れられていても、リアリティを失っていないものがたくさんある。それを『歴史の道具箱』から探し出す面白さを感じ取ってくれたらありがたい」